

『正法眼蔵』「仏性」卷における「仏性」の意味

石 井 清 純

はじめに

本論は、仮字『正法眼蔵』「仏性」卷において、道元禪師が、「仏性」をどのように概念規定しているのかを考察してゆくものである。それは、次のような問題意識にもとづいたものである。

筆者は、『正法眼蔵』における「大悟」の定義について、『印度学仏教学研究』五一巻一号、二〇〇二年十二月）において、『正法眼蔵』「大悟」の卷における道元禪師の「大悟」の定義について考察し、「悟り」という言葉は、現実化した理想的な状況を直接指し示すものではなく、むしろそれら全体に通徹する（仏祖としての）属性とでもいうべきものとなつてこよう。」という推論を提示した。しかし、「大悟」をそのように定義しようとすれば、そこに「仏としてのあり方」ともいうべき「仏性」という語の概念規程と大きく重なつてくる。しかも道元禪師は、「大悟」巻とは別に、長編の「仏性」

巻を著しており、これらの巻の主題となる語の関連性を明確にする必要が生じた。

そこで以下、「大悟」巻や、あるいはその他の巻に見られる普遍的属性を示す語との関連性を探る意味で、「仏性」卷の中における、「仏性」なる語の概念規定について考察してゆくものである。

一

それは、「大悟」巻の現存する二種の写本の内容対比から導かれたもののなのであるが、いまここに、再確認の意味で、両写本の末尾を対比して示す。上段「乾坤院本」が、修訂を経たもの、下段「真福寺本」が草稿とされる写本である。

〈乾坤院本〉

而今のさとり、昨日にあら

ずといはず、いまはじめたるに
あらず、かくのごとく参取

〈真福寺本〉

しかればすなはち、大悟、

たとひ大道を悟尽すとも、な
をこれ暫時の伎倆なり。

するなり。

しかあれば大悟頭黒なり、
大悟頭白なり。

『道元禪師全集』巻一・九九（巻三・六一三〜四頁）

〜一〇〇頁（以下、本書からの引用は署名を省略）

まず、両写本の末尾傍線部の解釈であるが、この「頭黒・頭白」については、近年、小川隆氏『「碧巖録」雑考（五）「藏頭白・海頭黒」と「侯白・侯黒」』（『禅文化』一八九号、二〇〇三年七月）によって、「黒は白の上前をはねる、一枚上手のさまを示す」との新たな解釈が示された。これを受けると、この部分は「大悟」という状態にあつて、更にその上前をはねる（それを越えた）「大悟」がある。」と解釈できよう。つまりここでは、「大悟」が、確固不変な「真理の表詮」として確立した状態にあるものではないことが示されている。これに類する表現は、仮字『正法眼蔵』各巻に参見されるが、これがひとつ、道元禪師の「大悟」定義の特徴とすることができよう。

これを直接受けた表現が、真福寺の本波線部である。ここにおいて道元禪師は、大悟を「かりそめのはたらき」とする。これは、悟りを最終的な到達点と見ず、あくまでも常に暫定的な状態とする、という「現成公案」巻等に見られる傾向を

大悟さらに大悟する、ゆへに大悟頭白あり、大悟頭黒あり。

そのまま受けたものといえよう。しかしその表現は、修訂を経て削除され、上段の乾坤院本では、むしろ、その遍満性が強調される傾向となる。これを筆者は、「大悟」に対する道元禪師の定義の揺れと見る。つまり、「遍満性」（≡全体的属性）としての「大悟」と、その現実への顕現としての「大悟」という二種の解釈が、ここに混在していることになると推測しているのである。

これは実に、『正法眼蔵』「古仏心」の巻における「古仏」と、「古仏心」という二種の語の概念規定より導かれた推論である。^③それは、「古仏心」巻の、次のような記述によつて知られる。

①国師因僧問、「如何是古仏心。」師云、「牆壁瓦礫。」（中略）かくのごとく功夫参学して、たとひ天上人間にもあれ、此土他界の出現なりとも、古仏心は牆壁瓦礫なり、さらに一塵の出現して染汚する、いまだあらざるなり。（巻一・八九〜九〇）

②祖宗の嗣法するところ、七仏より曹谿にいたるまで四十祖なり。曹谿より七仏にいたるまで四十仏なり。七仏ともに向上下の功德あるがゆえに、曹谿にいたり七仏にいたる。（中略）古仏にあらざる自己は、古仏の出処をしるべからず。古仏の在処をしるは古仏なるべし。（巻一・八八頁）

①では、南陽慧忠の機縁の語に基づき、傍線部にあるように「古仏心」を「牆壁瓦礫」としつゝ、それをさらに染汚な

き存在とする。「牆壁瓦礫」は、この世のすべて事象の代表者として持ち出されたものである。すなわち、「古仏心」という語は、その「心」という文字の持つニュアンスとは逆に、諸事象に内在するものではなく、外的に遍在する、この世界全体の清浄なるあり方を表現していることになる。

それに対する「古仏」であるが、②にみえるように、それは、「祖宗」の伝達者としての祖師（過去七仏を含む）とされている。この「祖宗」が、①の「古仏心」にあたることは明白で、それゆえに、この「古仏心」巻では、全体的属性と、その具体的表詮を区別して表現している可能性が指摘されるのである。

これがすなわち、先の「大悟」巻における「大悟」なる語の二つの性格を別の語で言い替えたものと考えられるのである。では、概念的にその「大悟」と隣接した意味合いを持つ「仏性」なる語は、「仏性」巻においてどのような性格付けが成されているのであろうか。それを次に見てゆくことにしたい。

二

結論を先取りすれば、「仏性」巻において、「仏性」なる語は、「大悟」巻の普遍的真理としての「大悟」、あるいは「古仏心」巻における「古仏心」と同様の意味を持ち、その現実

的表詮、つまり「古仏心」巻の「古仏」に相当する語としては、「衆生」が充てられているものと考えられる。それはまず、巻の冒頭にあたる次の一節に示唆されている。

世尊道の一切衆生悉有佛性は、その宗旨いかん。是什麼物恁麼來の道轉法輪なり。あるひは衆生といひ、有情といひ、群生といひ、群類といふ。悉有の言は、衆生なり、群有なり。すなはち悉有は佛性なり、悉有の一悉を衆生といふ。正当恁麼時は、衆生の内外すなはち佛性の悉有なり。（中略）まさにしるべし、悉有中に衆生快便難逢なり。悉有を會取することかくのごとくなれば、悉有それ透體脱落なり。（巻一・十四～十五頁）

これは、『涅槃經』「師子吼菩薩品」の「一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。」（大正二二・五二下）に対する道元禪師独自の解釈が示される部分であり、従来より、「仏性」巻の思想的特徴を端的に示した部分として頻繁に取り上げられるものである。

いまここでは、前節に見た、全体的属性（古仏心）とその具体的表詮（古仏）という関係でこの一節を見れば、それが、「仏性」が前者に対応し、後者には「衆生」が充てられることが分かる。すなわち、傍線部において、「悟り」あるいは「縁起」に相当する全体的属性を「仏性」（＝悉有）と読み替え、それが個々に現出する相を「悉有の一悉」＝「衆生（第二頭）」と定義しているのである。

これは従来から行われている解釈の延長上に位置するが、ここで強調しておきたいのは、「仏性」が、けっして何らかの存在に「内包」されたものではなく、むしろ逆に、すべての事象を内包する形で遍在しているものと意識されていることである。

次に、「仏性」巻の内容全体を概観しつつ、今少し、この点について考察してみることにする。それにあたつてまず指摘されるのが、この巻に「大悟」あるいは「さとり」という用語が一度たりとも用いられていないことである。引用される機縁の語にも、「省あり（ハタと気付くところがあつた）」という、悟りを意識させる表現すら見いだせないのである。

これを踏まえつつ、まず、全体の内容一覽を示しておく。

①『涅槃經』より「一切衆生、悉有仏性、如来常住、無有變易。」

・悉有_二仏性。そのなかの一悉が「衆生」。

・遍界不曾藏

・先尼外道の「我」および覺知・覺了批判。（仏性内在説批判）

・種子説批判

②百丈の語「欲知仏性儀、當觀時節因縁、時節若至、仏性現前。」

※大きな転釈あり

・「知」のみに限定せず。「行・証・説・忘」へと展開。

・「當觀」の意味の転換。

・「時節若至」の読み替え↓「すでに至る」へ。

『正法眼蔵』「仏性」巻における「仏性」の意味（石井）

③「五祖姓是仏性」の話

④「六祖嶺南人無仏性」の話

⑤「六祖無常即仏性」の話

⑥「龍樹身現円月相」の話 + 阿育王山の知客の因縁

⑦「塩官一切衆生有仏性」の話

⑧「瀉山一切衆生無仏性」の話

⑨「百丈最上乘」の話

⑩「南泉定慧等学」の話

⑪「趙州狗子」の話

⑫「長沙蚯蚓兩断」の話

この中で、まず先に指摘した「大悟」の語が用いられていないという点について、②の百丈の語に対する道元禪師の読み替えについて考察してみたい。その内容は以下の通りである。

しるべし、時節若至は、十二時中空過なり。若至は既至といはんがごとし。時節若至すれば、仏性不至なり。しかあればすなはち、時節すでにいたれば、これ仏性の現前なり。あるひは其理自彰なり。おほよそ時節の若至せざる時節いまだあらず、仏性の現前せざる仏性あらざるなり。（巻一・一九頁）

ここでは、まず前半の傍線部において、「若至（若し至れば）」とう、時間的に未到達な状態を示す語を、「既至（既に至れり）」と、現在の状況を示すものとして解釈しなおしている。そして、それを受けて、後半の傍線部では、「時節が既にやつ

て来ているからには）仏性は、仏性として（そのまま常に）現前している」と述べる。これは、「仏性」という概念から、まず時間的制約を取り去り、それによって遍満性を強調したものと見ることができよう。

つまり、この一節によれば、この巻において、完成者としての普遍的な属性の認識は、すべて「仏性」あるいは「悉有」という語で表現されていることになる。同じ概念を示すに、二種の語を用いることは混乱を招く、道元禪師は、この「仏性」巻においては、敢えて「大悟」、あるいはそれに類する語を用いることなく、すべて「仏性」という語でそれを統一したものである。

さらに具体的に、⑦塩官齋安の「一切衆生有仏性」と⑧瀧山靈祐の「一切衆生無仏性」という、相反する句に対する解釈を対比させながら、その中で道元禪師がどのように「仏性」を定義しているかを明確化してゆくことにする。

まず、「有仏性」に対しては、次のような拈提がなされる。

a いま仏道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆえに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆえに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。草木国土、これ心なり、心なるがゆえに衆生なり、衆生なるがゆえに有仏性なり。日月星辰これ心なり、心なるがゆえに衆生なり、衆生なるがゆえに有仏性なり。国師の道取する

有仏性、それかくのごとし。（巻一・三三頁）

b 一切衆生即仏性といはず、一切衆生有仏性といふと参学すべし。（同右）

まず、道元禪師は、引用文 a において、傍線部のように「衆生」を「有心者」のみならず「無心者」をも含むものとする。これは、「衆生（存在）は、（無条件に）心である」、「心は、そのままに衆生である」と定義しようという意識にもとづいていよう。そしてそれゆえに、「衆生はみな（有仏性）である」とされるというのである。

引用後半部では、「日月星辰」・「草木国土」という、全ての事象を象徴する語を持ち出して「有仏性なり」と、再度それを強調しているのであるが、ここで、問題なのは、この「有仏性」の解釈となる。ここでこれを「仏性を有する」と、仏性を内在するものと解釈することは、前掲の一覧表①において、はっきりと否定される。その上に立つて、右の引用 b を見ると、さらにそこには「即仏性といはず」とあって、仏性と衆生が、無条件に一つであることも否定される。この二つの条件下で、「有仏性といふ」（引用 b 傍線部二箇所め）とあるのを解釈するには、最終的に、それが「仏性の中の個々としての存在（有）」を意味しているものと解釈せざるを得ない。

次に⑧の「一切衆生無仏性」についてであるが、それに対

しては次のような拈提が見られる。

一切衆生なにしてか仏性ならん、仏性あらん。もし仏性あるは、これ魔儼なるべし。魔子一枚を将来して、一切衆生にかさねんとす。仏性これ仏性なれば、衆生これ衆生なり。衆生もとより仏性を具足せるにあらず。たとひ具せんともとむとも、仏性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり。張公喫酒李公醉といふことなかれ。もしおのづから仏性あらんは、さらに衆生にあらず。すでに衆生あらんは、つひに仏性にあらず。(巻一・三四〜五頁)

この引用冒頭の傍線部には、道元禅師の問題提起の形で、瀉山の「一切衆生無仏性」に対する理解の方向付けがなされている。それは、⑦において否定されたと同じ、「衆生と仏性の一体(仏性なり)」あるいは「衆生の仏性の内包(仏性あり)」とする誤った解釈を拒否する方向へと向かう。そしてそれは、引用文後半においても繰り返し主張される。その中で、両者の関係を示しているのが波線部であるが、ここでは、「仏性が仏性であれば、衆生が衆生である」と、衆生をあらしめる前提として仏性が位置づけられるものとなっている。

以上のように見ると、この『正法眼蔵』「仏性」巻における「有仏性」・「無仏性」解釈は、前者は、「仏性の個々の現出として衆生があること」を、後者が「仏性は、衆生と全同ではなく、内包されるものでもない、」ことをあらわしたものとされていることになろう。

『正法眼蔵』「仏性」巻における「仏性」の意味(石井)

むすび

以上、冒頭に示した問題意識の下で、ごく一部ではあるが仮字『正法眼蔵』「仏性」巻における「仏性」の語の概念規定について考察してきた。そしてそれは、内在でもなく、一体でもないという意味に置いて、「大悟」巻において定義されていた「大悟」の定義の一つ、「全体に通徹する仏祖としての属性」と極めて類似したものであることは指摘できたと考える。

しかし、「仏性」の語については、その解釈に「大悟」巻のような両様の解釈への「揺れ」は見られず、共通する本質的属性としての「仏性」の対として、無情をも含んだ万象(ただし、認識対象としては個々)としての「衆生」の語が提示される。これらは、「古仏心」巻の「古仏心」と「古仏」とに比定することが可能であり、その意味では、明確に、「遍満している属性」と(限定された)その具体的顕現」としてこの現象世界を把握してゆこうとする『正法眼蔵』に特徴的な論理へと展開しているものと考えられる。

つまるところ、道元禅師は、認識作用を越えた全体的属性を、仮字『正法眼蔵』の多くの巻において説き示しているものの、それは統一された単語をもって語られることなく、むしろ、各巻の主題に即して、「大悟」・「仏性」・「古仏心」な

『正法眼蔵』『仏性』巻における「仏性」の意味（石井）

どの個々の用語を用いて表現しているものと考えられるのである。

ただし、「大悟」巻に、草稿本と完成稿とが存在していたように、「仏性」巻には、大きな修訂の跡形が存在している。本稿においては、それらの改変の様相については論じることではできなかったが、「仏性」の語も、仏教思想史上、多様な展開を示してきたものである以上、修訂段階における解釈の力点の変化は容易に想像できるものである。これについての詳細な検討は今後の課題としたい。

1 ここでは、「仏向上事」巻の「まさにしるべし、仏向上事は、在因にあらず、果満にあらず。『道元禪師全集』巻一・二八五頁）および「現成公案」巻の「身心に、法いまだ参飽せざるには、法すでにたれりとおぼゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおぼゆるなり。」（同右・四頁）の二例のみを挙げておく。

2 拙稿『正法眼蔵』『現成公案』の巻の主題について』（『駒澤大学仏教学部論集』二八号、一九九七年十月）

3 「古仏」と「古仏心」の関係については、拙稿「道元禪師における仏祖との共生について」（『日本仏教学会年報』六四号、一九九九年五月）において詳細に論じた。

4 鏡島元隆『道元禪師と引用經典語録の研究』（木耳社、一九六五年十月）第二節第一項（六四く六七頁）、高崎直道「道元の仏性論」（『講座道元四 道元思想の特徴』第三章、一九八〇

年九月）など。なお、この両論考には、本稿を作成するにあたって多くの示唆を得た。

（キーワード）『正法眼蔵』、仏性、衆生、大悟、古仏心

（駒澤大学教授）

144. Dōgen's Concept of the Word "Buddha Nature" in the *Busshō* Fascicle of the *Shōbōgenzō*

Kiyozumi ISHII

In this paper, I would like to confirm how Dōgen defines the word *Busshō*, or Buddha Nature, in the *Busshō* fascicle of the *Shōbōgenzō*. I conclude that the word *Busshō* has a meaning similar to the word *Daigo*, or the Great Attainment, in the *Daigo* fascicle of the *Shōbōgenzō*. It indicates the attribute of the whole world as Buddha, and its individual emergence as any phenomena could be called *Shujō*, or Sentient Being. Though this definition might be unique in Buddhist thought, it is a specific aspect of Dōgen thought.

145. On the Economic Ethics of Suzuki Shosan

Akira KASAI

The purpose of this paper is to consider the economic ethics of Suzuki Shosan. Economic ethics means vocational ethics, and Suzuki explained vocational ethics in his main published work *Banmin Tokuyō*. His vocational ethics was based on the principle that worldly things are Buddhism. He looked on one's vocation as the other self of the Buddha. Every vocation as training improves one and relieves his mind. There is a Japanese vocational ethics. It continues living in the Japanese mind.

146. The Twenty-five Historical Holy Places of St. Hōnen's Activities and the Ōsaka-kō

Hiroko YAMAMOTO

In research up to now, it was thought that the twenty-five historical holy places of St. Hōnen's activities were established and pilgrimage developed only by the effort of the priest Reitaku. However, in Reitaku's own "*Guide book to twenty-five historical holy places related to the great master Enkō*"